

# 学習院アーカイブズ ニューズレター

# 04

Gakushuin Archives Newsletter 2014.7.25 vol.



## 大講義室

学習院大学が開学した1949（昭和24）年10月に竣工、写真左は1954（昭和29）年に増築改修が行われた直後の撮影である。戦後の目白キャンパスに建てられた最初の本格的建築物で、授業・式典のほか音楽・演劇公演にも使用され「テアトル目白」の愛称で親しまれた。写真右は1964（昭和39）年3月に開催された中等科謝恩会。1992（平成4）年に取り壊され、跡地には西5号館（本部棟）が建っている。



## Contents

### 学習院中等科史資料の概要

中等科教諭 森内 隆雄 ..... 2

### 東京大学文書館の設置について

東京大学文書館 特任准教授 森本 祥子 ..... 4

戸田平橋と北條時敬院長 桑尾光太郎 ..... 6

主な活動（2014年2月～2014年7月） ..... 7

# 学習院中等科史資料の概要

中等科教諭 森内 隆雄

(学習院アーカイブス運営委員)

学習院は明治10(1877)年の開業時に、現在の初等教育・中等教育に相当する学科課程がおかれた。戦前までの学習院の史資料の中核は旧制中等科・高等科時代のものが占め、それらは学習院アーカイブズが保管しているため、現在の中等科には主として戦後からの史資料が残されることになる。しかし、戦後小金井・戸山・目白と校舎の移転を重ね、平成10(1998)年には現校舎に建て替えたこともあって、残存する中等科関係史資料は少ない。卒業生等が所蔵する史資料も、学習院アーカイブズや大学史料館に寄贈されることが多いのではないだろうか。

過去に学校行事に関する資料を各学年の行事担当教員から収集したことがあるが、系統だった収集や調査・整理はまだ行われていない。今回は、中等科図書室書庫に保存されている資料の一部を紹介するにとどめた。将来に向けての参考となれば幸いである。

## 1. 学校行事関係

中等科では学年行事・希望者参加の行事・学校全体での行事が行われる。学年行事は沼津游泳(平成3年から希望者参加となった)・長距離歩行・修学旅行・遠足・八幡平林間学校、希望者参加の行事はスキー教室・農業体験・ニュージーランド語学研修、学校全体の行事としては運動会・鳳櫻祭(文化祭)・

クラスマッチ(球技大会)などがある。例えば、遠足及び林間学校に関する「しおり」のような配布書類や冊子は、次の通り残されていた。

- ・多摩御陵参拝(1年生・3年生) 昭和21～22年
- ・一泊旅行(富士山・富士五湖、1年生) 昭和44～46年
- ・相模湖ピクニックランド(現さがみ湖リゾートプレジャーフォレスト、1年生) 昭和60年～
- ・長距離歩行(伊豆・箱根、2年生) 平成4年～
- ・林間学校(2年生)  
妙高登山・菅平高原・天元台 昭和43～48年、  
八幡平 昭和50年～



沼津游泳写真

游泳は明治18(1885)年から行われている最も長い伝統をもつ行事で、沼津游泳場は明治45(1912)年に開設し、翌大正2(1913)年から游泳に利用された。小堀流踏水術師範でもあった猿木恭経元中等科長が所蔵していた昭和12(1937)年からの游泳関係写真および資料が寄贈されており、当時の游泳の様子を確認できる。同年には女子学習院が沼津游泳を開始したため、女子学習院游泳の写真も含まれている。ほか鳳櫻祭・修学旅行・附属戦・立教戦・スキー教室・運動会などの「しおり」やプログラムなどが



林間学校のしおり





附属戦プログラム（昭和28年）

保存され、とくに附属戦（東京教育大学附属中学校＝現筑波大学附属中学校との定期戦）プログラムについては、昭和28（1953）年開催の第1回総合定期戦から保存されている。

行事写真については昭和30年代以降断片的にしか残されていないが、平成以降の各行事についてはアルバムにまとめられた形で保存されている。

保存されている。

## 2. クラブ活動など

「輔仁会中等科支部活動の記録」が平成元（1989）年度より発行され、平成11（1999）年度より「学習院中等科活動の記録」に改称した。各部・同好会や委員会の活動報告、運動部の主な戦績・記録、運動部・文化部の表彰、行事報告（春季クラスマッチ・夏合宿・立教戦・鳳櫻祭・秋季クラスマッチ）などが掲載されており、中等科生の主たる活動がわかる内容となっている。個別のクラブについては、陸上競技部・剣道部・水泳部・音楽部・鉄道研究部などの資料が比較的まとまって残されている。文芸部が昭和23（1948）年から発行した文集『落葉松』は、のちにタイトルを変えながら発行を続け、断片的ながらバックナンバーが残されている。このほか部員名簿（昭和46～54年）、部活動記録（昭和46～48年）、委員会名簿（昭和33～48年）などがあるが、正確な確認はこれからである。



文芸部発行『からまつ』

## 3. 各種印刷刊行物

『中等科新聞』は1～133号（昭和27～59年）、『図書新聞』は創刊号（昭和54年）より最新号まで保存されている。卒業アルバムは昭和24年度以降残されており、戸山時代の教室やキャンパスの様子を伝える写真も収録されている。「中等科ハンドブック」は平成14年度から発行が始まり、各教科の概要や授業時数、使用教科書・副教材、生徒の通学区域などを掲載し、中等科の教育の概要を伝える構成となっている。ほか印刷刊行物として「卒業文集」（昭和27・34年以降、断片的に残存）、「読書ノート」（昭和30・31・33年）などがあるが、全体はまだ把握できていない。



戸山校舎の教室（昭和24年度卒業アルバム）

## 4. これからの課題

以上、図書室書庫に収蔵される史資料の一部を紹介したが、未整理のうえ平成以前の記録や資料は断片的にしか残されていないケースが多い。そこをどう埋めていくかが大きな課題である。退職された先生方及び、中高校友会を通じて卒業生に協力を呼びかける機会を作る必要がある。当然のことながら学校の資料には生徒の個人情報が多く含まれ、学校の歴史を示す貴重な資料とはいえ、むやみに公開できるわけではない。継続的に収集・整理を進めるとともに、それらの資料を今後どのように取り扱っていくかを考えなければならない。

過日、静岡県磐田市にある旧赤松家記念館を訪ねた。幕末に幕臣としてオランダ留学し、のちに海軍や造船に功績があったことで男爵となった赤松則良の旧宅である。その御子孫が戦後まもなく磐田市長をつとめた赤松照彦氏で、記念館には照彦氏の幼少の写真が展示され、その中に中等科在学時代の制服姿の写真があった。私たちの知らないところに学習院の様々な史資料がまだ眠っているのではないかと、史資料探しの努力を続けていく必要性を痛感している。

# 東京大学<sup>ぶんしょかん</sup>文書館の設置について

東京大学文書館 特任准教授 森本 祥子



## 1 東京大学文書館の設置

平成 26 (2014) 年 4 月 1 日、東京大学文書館 (以下、文書館) が設置された。その目的は、「東京大学にとって重要な法人文書及び本学の歴史に関する資料等の適正な管理、保存及び利用等を行うことにより、本学の教育研究に寄与すること」(文書館内規第 1 条) である。

東京大学のアーカイブズ設置は、本学の百年史編纂に着手した昭和 49 (1974) 年以來、実に 40 年がかりの悲願だった。昭和 49 年といえば、まだ日本に数えるほどしか「文書館」がなかった時代である。その当時から大学アーカイブズの必要性を強く感じ、年史編纂と平行してその構想を練っていたことについては、先見の明があったと言えるだろう。昭和 62 (1987) 年の『東京大学百年史』刊行終了に伴い、その遺産が大学史史料室に引き継がれた翌年には、事務局管理文書の史料室への移管が文書管理規則上に明記されるなど、スタートは順調だったようにみえる。けれども、アーカイブズ業務が真に稼働することが容易でないことは、おそらくアーカイブズに関わるすべての人がいやというほど承知していることであろう。本学も例外ではなかった。そして他の国立大学が情報公開法や公文書管理法を契機として急速に文書保存体制の整備を充実させていくなか、様々な不運に見舞われたことも少なからず手伝って、本学ではその波に乗れずにきた。公文書管理法施行から 3 年を経て、ここによくやく東京大学のアーカイブズ整備体制の第一歩を踏み出せたところである。

## 2 東京大学文書館の位置づけおよび構成

まずは文書館に関わる基本情報を整理しておこう。

文書館は、総長室総括委員会傘下の組織である。この位置づけの各組織は、「複数の部局にまたがる領域横断的な教育研究プロジェクト、総長の強いリーダーシップの下で全学として推進すべき重要プロジェクト、大学として一元的に実施する必要がある環境安全などの業務」(総長室総括委員会委員長挨拶より) をするものとされている。組織運営支援の側面と教育研究支援の側面の双方を併せ持つ大

学の文書館にとって、まずはよいポジションに設置できたといえよう。

発足時点での文書館スタッフは、館長、副館長、特任准教授、助教、教務補佐員、事務補佐員がそれぞれ 1 名ずつの、計 6 名である。館長は元理事であり、現在は総長顧問でもある。また副館長は副学長である。館長・副館長ともに実質的に文書館業務にコミットしており、これも文書館の船出として恵まれている。

文書館は大学史部門、法人文書部門、デジタルアーカイブ部門の 3 部門から構成されている (図参照)。しかしスタッフ体制をみれば一目瞭然のとおり、この体制がすぐに実稼働できるわけではない。現段階ではこの構成は理念上のものであり、その実現に向けて人員体制の強化や活動の拡大に着手したところである。

大学史部門は、旧大学史史料室の役割を主として引き継ぐところである。関係個人等からの資料の寄贈を受けたり、創立 150 周年を視野に入れた準備を進めたりといった業務を担当する。その中で今回新たな業務として「自校史教育」に着手した。これは学部 1・2 年生を対象に実施されている半期単位のテーマ別講義のひとつとして位置づけたものであり、文書館からは吉見俊哉副館長が全体のコーディネーター、筆者が各回の司会役 (ナビゲーター) として関わっている。一人の教員が通史を語るのではなく、各回異なる教員がその専門分野の歴史を講義する形をとっている。自校史教育のあり方については様々な議論があると思うが、オムニバス形式は学生が各分野の一流の話を聞けるだけでなく、文書館にとっても、各講師を通じてその所属学部と連携をとるきっかけになるというメリットがある。

法人文書部門は、大学の法人文書移管を受け、保存管理するのが仕事である。大学史史料室を廃して文書館とした最大の目的は、この法人文書保存機能をもつためである。現段階ではまだ国立公文書館等としての指定を受けていないため、ただちに文書の移管を受けるわけではないが、可及的速やかに指定

# 東京大学文書館の設置

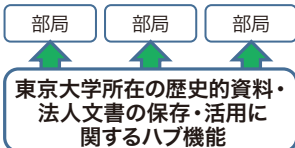
## (設置の趣旨)

東京大学の法人文書その他東京大学の歴史に関する資料や情報等の収集、活用や自校史教育などの本学独自の活動の中核施設として、「文書館」を設置

(公文書等の管理に関する法律(平成21年法律第66号))

## (文書館の機能)

- ①東京大学史に関する研究及び大学史関係資料や情報の収集と提供  
(歴史的な文書情報のハブ機能)
- ②公文書管理法に基づく法人文書の保存と活用
- ③図書館・博物館と連携した大学リソースの活用及び新たな研究開発
- ④研修・教育機能への貢献



## (設置形態)

- ・総長総括委員会の下に、組織規則第13条の組織として設置
- ・将来的には、全学センターとして活動

## (設置場所)

- ・柏地区
- ・本郷地区

## ①大学史部門

- ・東京大学の大学史資料に関する研究
- ・東京大学史資料の収集と提供及び保存・活用
- ・東京大学150年史の編纂及び自校史教育
- ・アーキビスト養成

## ②法人文書部門

- ・本学の歴史的に重要な法人文書の保存・活用
- ・文書の閲覧・公開への対応
- ・研修の実施

## ③デジタルアーカイブ部門

- ・東京大学の歴史的資料・法人文書のデジタルデータ化
- ・東京大学150年史編纂への活用
- ・自校史教育への活用
- ・文書の閲覧・公開への活用

東京大学の歴史的資料の活用による大学価値とアイデンティティの向上

## 東京大学文書館の目的と構成

されるよう、現用文書管理と連携しつつ準備を進めているところである。

デジタルアーカイブ部門は、単に順繰りに資料をデジタル化するのが仕事ではなく、どのようなデジタルアーカイブ・システムを構築すればよいかを研究し、実現することが任務である。このような役割をアーカイブズ内に持つことは、研究開発機能を持つ大学ならではのものかもしれない。

ところで、文書館の役割は、「東京大学所在の歴史的資料・法人文書の保存・活用に関するハブ機能」と設定された。本学は学部や研究所毎に成り立ちが異なり、現在に至るまでその独立性がとても強い。そしてそれぞれに図書室を持っていることはもちろん、資料室や博物館を持っているところもある。そうした中で、どこの学部・研究所にも所属しない文書館が、これらの多様な学内資料保存施設をつなぐ役割を担うべきだと考えている。文書館の資料を他でも活用してほしいし、逆に文書館にきた問い合わせに答えうる情報が他にあるならば紹介したい。文書館がすべてを持つ必要はない。情報を共有できればよいのである。

### 3 学習院アーカイブズに学ぶ

筆者はかつて学習院大学大学院アーカイブズ学専

攻に勤務していた。ちょうど時を同じくして学習院アーカイブズが立ち上がり、筆者は担当していた授業で早速アーカイブズの所蔵資料を使わせていただいた。アーカイブズ学を学ぶうえで資料取り扱いの実体験が不可欠なのは言うまでもないが、その際に自分たちが籍を置く大学の資料を使えるということは、親近感を持って向き合えるという点で大きなメリットがある。いちど、学生の一人が面白いことに気づいた。大正天皇崩御の報を受けてから、きっちり1年間、すべての押印が黒印になったのである。服喪の意味と推測され、その徹底ぶりはさすが学習院である。こうしたことに目が向くのも、学生がなじみのある組織の文書だからだと思う。東京大学文書館もいずれ教育に関わっていききたい。

規模や性格からいうと、実は学習院全体と東京大学全体とは、案外似ている。例えば東京大学の附属病院と文学部との距離感は、学習院の初等科と大学ぐらいの距離感があるように思う。となれば、学習院アーカイブズは東京大学文書館にとって、数ある先行する大学アーカイブズの一つにとどまらない、本当に近い先輩なのである。学習院アーカイブズが、いかにして幼稚園から大学、法人全体まで着実にその存在についての理解を広げてきたか、ぜひとも学びたいと思っている。



## 戸田平橋と北條時敬院長

桑尾 光太郎



学習院目白キャンパスの馬場門から高田馬場方面に向かい、神田川に架かる戸田平橋を渡ると、橋の竣工を記念した高さ2メートルほどの立派な石碑が建っている。碑文には「大正八年十二月竣工 戸田平橋 戸塚新道 記念碑 従三位 北條時敬書」と刻ま

れている。北條時敬（ほうじょう・ときゆき 1858～1929）は、金沢の生まれで山口高等学校・第四高等学校・広島高等師範学校の各校長、東北帝国大学総長を歴任し、1917（大正6）年8月から第12代学習院長に就任した。教え子にはいずれも学習院教授となった西田幾多郎・鈴木大拙・山本良吉らがいる。北條の遺稿集『廓堂片影』（1931年）に収録された「日誌」には、1919（大正8）年12月31日に「水野勝太郎氏来り架橋落成記念ノ揮毫ヲ依頼ス」とあり、碑文の揮毫は院長在任中に頼まれていることがわかる。

高等教育界の大御所でもあった北條といえども、院長在任時は順調な学校運営といかなかった。当時の新聞は、学習院に「大学」を創設する構想と、その中心に北條がいたことをさかんに報じている。1919年に第七高等学校教授から学習院教授に転任した天野貞祐は、「わたしが学習院へ招かれたのは、宮内省が北條時敬氏を東北大学総長から招聘して学習院に大学を創設するためであった」（『教育五十年』）と記している。しかし大学設置は、結局実現に至らなかった。

さらに、学内教員間の派閥争いも深刻だったようだ。『東京朝日新聞』（1919年8月15日）は、学習

院主事松井安三郎教授の休職に関し、「目下学習院内部の状態は乃木院長時代よりの古参教授と北條現院長及同氏の手にて就任せる新教授との間に暗闘絶えず為に院の内部は事毎に紛糾を極め居れば……」と報じている。再び天野貞祐の回想を紹介すると、「当時の学習院は北條時敬先生が東北大学から院長として来任し、京都大学の学生監山本良吉先生を院長の顧問役に採用し山本先生を参謀として、新教員の採用など一切の行政をされたために、旧来の先生方には必ずしも歓迎されなかったようである（略）学校の派閥争いがひどく北條院長は山本良吉先生を始め院長の採用された（主として広島高師関係の）人達と共に学習院を去られた」（『教育五十年』）とある。日誌によれば北條院長は1920（大正9）年2月から辞意を固め、同月末宮内大臣に辞表を提出し4月5日付で辞職している。辞職に際しても、「随分どさくさがあるので氏の辞職は自然の勢で已むを得ない」（『読売新聞』1920年3月26日）といった報じられ方をされている。



大学設置構想が頓挫に至った経過や、教員間の内紛について、『学習院百年史』のような沿革史は扱っておらず、関連史資料の調査や事実解明は今後の課題である。北條時敬に限らず、学習院の歴代院長には日本の政治・軍事・学問をリードした著名人が多くいるにも関わらず、乃木希典や安倍能成を除くと個々の院長の遺品や書・書簡といった記念の品が学習院にはほとんど残されていない。筆者も戸田平橋の碑文の揮毫が北條時敬によることを、最近になって初めて知った。（学習院アーカイブズ職員）

# 主な活動

(2014年2月～2014年7月)

## ◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新（平成25年度作成文書ファイルの追加、平成15年度以降作成文書ファイルの遡及入力）
- ②西5号館地下倉庫の文書ファイル等の仮目録および評価選別案作成（財務課・会計課・大学学生課・大学経営企画課）
- ③「文書ファイル整理・管理の手引き」の作成と配布（2014年5月）

## ◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①初等科所蔵文書・資料の調査および整理（継続）



初等科所蔵疎開日誌

- ②女子部史料室所蔵資料の選別・整理および目録作成（継続）
- ③女子部史料室所蔵古写真の整理・デジタル化
- ④アーカイブズ所蔵資料の整理（明治大正期の新聞切抜・卒業証書・戦時期初等科文書・戦前期学籍簿・校舎図面ほか）

## ◆史資料のデジタル化・修復

- ①宮内庁宮内公文書館所蔵「学習院写真帖」

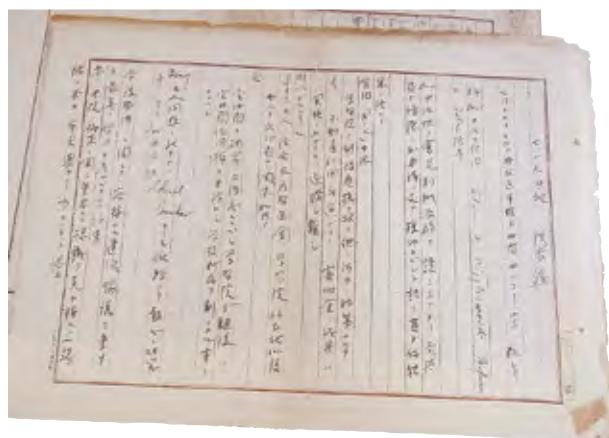


明治・大正期新聞切抜き

- ②幼稚園所蔵写真（APSフィルム）（継続）
- ③「教育部へノ請願案」（GHQとの交渉文書、1946年作成）の修復（継続）
- ④自動演奏ピアノの調律・修理（2014年4月）

## ◆史資料の受贈

- ①軸（乃木大将真蹟、学習院長大迫尚敏箱書）
- ②「大礼奉賀献上写真帖」（学習院女学部版）、「皇太子殿下御卒業奉祝記念写真帖」
- ③加藤雪子『夏季休業日誌』（学習院女学部生徒日誌の影印本）掲載写真ポジフィルム・紙焼



修復作業中の対GHQ交渉文書

- ④「おたより」第90号（昭和19年5月12日 女子学習院発行）
- ⑤「初等科卒業写真帖」（昭和4年）、「高等科卒業写真帖」（昭和12年）、教員・学生スナップアルバム、沼津游泳・音楽部写真等
- ⑥「櫻友会会員名簿」（昭和19年1月発行）
- ⑦沼津游泳関係資料・映像
- ⑧ヴァイニング講師授業風景写真（昭和22年）
- ⑨女子学習院卒業記念写真（昭和18年中等科、昭和20年高等科）

#### ◆教育支援・広報支援等

- ①生涯学習センター講座「学習院からみる日本の近代・現代」「安倍能成と学習院—硬骨のリベラリストと戦後日本」の講師担当（2014年2～4月）
- ②学習院初任者教員研修「学習院の歴史と教育」の講師担当（2014年4月）
- ③大学基礎教養科目「近代日本と学習院」講師担当
- ④『学習院広報』への寄稿（「史資料からみる学習院」）
- ⑤『大学時報』への寄稿（「私学としての再出発と大学開学」）

#### ◆史資料の貸出し・展示協力

- ①学習院大学史料館展示「馬—その歴史と学習院」への資料貸出し（2014年4～6月）
- ②明治神宮展示「明治の皇后—明治天皇と歩まれた昭憲皇太后」への女子部所蔵資料貸出し（2014年3～5月）
- ③『目で見える豊島区の100年』への写真提供

#### ◆学外学習院関係資料の調査・収集

- ①宮内庁宮内公文書館所蔵の学習院関係資料（約400件）の調査（2014年5月～）
- ②北鎌倉東慶寺墓所調査（2014年4月6日、安倍能成・鈴木大拙・西田幾多郎ほか）
- ③明治神宮昭憲皇太后百年祭での女子高等科生徒による御歌「金剛石 水は器」奉納を取材（2014年4月6日）

#### ◆その他

- ①『学習院女子中等科 女子高等科 125年史』の改訂増刷
- ②立教学院展示館視察（2014年5月16日）
- ③全国大学史資料協議会東日本部会総会・シンポジウム「大学の新しい使命と展示活動—アカウントビリティと自校教育を中心に—」参加（会場立教大学、2014年5月29日）
- ④公文書管理セミナーへの参加（行政管理研究センター主催、2014年5月26日）
- ⑤全国大学史資料協議会東日本部会研究会、東京外国語大学文書館見学（2014年7月17日）



女子部生徒による御歌奉納（明治神宮）

#### 資料提供のお願い

学習院の歴史を示す書類・写真・印刷物などをお持ちでしたら、ご教示くださいますようお願い申し上げます。クラブ活動やゼミ活動・文化祭の記録、写真、時間割、記念品、映像フィルム等々、在学・在職時代の思い出の品々が貴重な歴史資料となります。

#### 学習院アーカイブズ・ニュースレター第4号 2014（平成26）年7月25日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ  
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1  
TEL 03-3986-0221（内線2531、2551）  
事務室 西5号館（本部棟）地下1階